

異文化理解教育と映画の活用—講義「クロスカルチャー」における実践から—

中村 真里絵\*

Education for Cross-Cultural Understanding through Movies

Marie Nakamura

多くの教員が映画を講義に活用することの有用性を認めながらも、時間的制約や娯楽性に偏ってしまう可能性への懸念を理由に、実際には利用するのをためらうことが多い。本稿は、執筆者が四条畷学園短期大学ライフデザイン総合学科において担当している「クロスカルチャー（比較文化）」の講義を取り上げ、学生のリアクションペーパーや学年末のアンケート結果を参照資料とし、異文化理解教育において映画を教材として活用することの可能性を検討するものである。講義では、主にタイをはじめとする東南アジア映画を取り上げ、リアクションペーパーの使用に工夫を凝らすなかで、講義の質を高めてきた。学生たちの反応などを総合すると、講義に映画を活用することは、学生が異文化に関心を持ち、学習に積極的に取り組むうえで、たしかに有利性、効果的な側面があることが明らかになった。

**Key words:** 異文化理解、東南アジア映画、講義形式、ワークシート

1. はじめに

本稿は、執筆者が四条畷学園短期大学総合ライフデザイン学科において担当している「クロスカルチャー（比較文化）」の講義を取り上げ、異文化理解教育において映画を教材として活用することの可能性を検討するものである。

近年の急速なデジタル化の進展により、映画<sup>(注1)</sup>は我々に身近な存在となった。観ることについては、映画館やテレビのみならずインターネットを通じて容易になり、撮影、編集についても、専門家が掛かりな機材を用いる場合に限らず、デジタルビデオカメラや携帯電話、パソコンの汎用化によって、以前では考えられないほど手軽につくれるようになった。こうした時代に生きるうえで、映画を観たり、作ったり、映したりするのに、必要な知識やマナーを学ぶために、映像リテラシー教育の必要性が指摘され、その整備が進んでいる。

しかし、こうした近年の日常生活における必要性からの教育とは別に、映画を教育の場で利用する動きはさらに以前からあった。日本において映画教育の必要性が民間からも国からも意識され始

めたのは、古くは1910年代からあったが、その後は特に大きく進展してこなかった。そして、2001年の文化芸術振興基本法の公布において、映画は学校教育や生活一般において文化芸術活動の充実を図るという狙いで法制化された。この基本法において、映画は文化芸術として位置付けられ、その価値が再考された〔村山2008:59〕。

実際、映画は観る者の視覚に直接、訴える利点があり、学生の理解の促進やモチベーションを上げるツールとして講義においてその役割への期待は大きいといえる。しかしその一方で、その多くは補助的役割に留まっているのがほとんどである。

特に、文化に関わる教育に限って映画を利用することを考えてみると、次の二つのアプローチが考えられる。一つは映画制作を通じて、表現の方法を学ぶことである。もう一つは映画を鑑賞し、そこに表現されている事象を分析し、それらの生み出された背景や考え方を学ぶことである。

前者の映画制作については、もちろん専門学校や大学で映像を専門に学ぶこともあるが、文化との関わりに関して言えば、文化人類学などのフィールドワークの手法の一つとして映画制作を講義の一環として学ぶことがあげられる〔南出・秋谷

\* 四條畷学園短期大学 ライフデザイン総合学科  
国立民族学博物館 外来研究員

2013、山中 2002]。こうした調査の実践において、撮影に関わる他者との交渉や、編集作業の過程において撮影された素材を何度も観ることで、調査対象者や彼らの生きる社会背景への理解を深めていくことができる。

後者については、映画に当該社会の文化がどのように表象されているのかを検討し、その背景にはどのような視線があるのかを理解しようとするものである。例えば、ハリウッド映画において日本人がどのように表象されているのかを観察し、アメリカ人にとって日本人の典型的イメージはどのようなものなのか、またそれはどこから生まれたのかを検討する事例もある [佐藤 2002、森野 2003]。こうした講義の実践例の報告を参照すると、英語を始めとする外国語教育との関わりから文化を学ぶものが多くみられる。多くは、いわゆるハリウッド映画を題材としており、劇中に交わされる台詞から、生きた英語のやりとりを学ぶと同時に、その背後にある文化を知ることを目的とした講義である [石川 1995、桑本他 2008、高瀬 1998、森泉 1997]。このように、異文化理解を目的とする講義においては、映画は制作者の育った背景や舞台の文化背景を映し出しているため、多くの異文化情報を提供してくれる利点があり、他者表象の視点を学ぶのに適している。しかし、こうした映画を用いた教育の方法については、まだ模索している段階で、事例の蓄積としてはそう多くはないのが現状である。

本稿で取り上げる講義「クロスカルチャー」は、異文化理解を講義の第一目的とし、学生たちが身近にある欧米文化とは異なる、東南アジア文化に関わる映画を取り上げてきた。受講するのは、ライフデザイン総合学科の学生で、特定の言語や文化を専攻しているわけでもない。4年間の講義で各セメスターにおける平均受講人数は、20人程度であった。本稿は、彼らに提出してもらった映画鑑賞ノートと2013年1月に実施した

学期末アンケートを参照し、講義を通して学生たちの異文化理解と映画との関わりを考察するものである。

多くの教員が映画を講義へ利用することの有用性を認めながらも、時間的制約や娯楽性に偏ってしまう可能性への懸念を理由に、実際に利用するのをためらうことが多い。講義において、映画を補足的に利用するのに留まらず、積極的に取り入れる実践例のひとつとして本稿を提示し、異文化理解教育における映画利用の有利性について明らかにしたい。

## 2. 講義における映画の活用

### (1) 映画の選定

まず、クロスカルチャーの講義の流れについて説明する前に、どのような映画を選定し、講義の準備をしてきたかについて簡単に述べたい。筆者がクロスカルチャーの講義を担当するようになった2010年度以降、講義の題材として、執筆者の専門とするタイにおいて制作された映画か、もしくは東南アジアの国で制作された映画を取り上げてきた。特に2013年度は、タイ映画を中心に選定した。

表1 これまで取り上げてきた映画

タイトル (原題)	製作国	製作年	テーマ
『アタック・ナンバーハーフ』 (Satree lek)	タイ	2000	ジェンダー、性的マイノリティ
『アタック・ナンバーハーフ2 全員集合』 (Satree lek2)	タイ	2002	ジェンダー、性的マイノリティ
『わすれな歌』 (Mon rak Transistor)	タイ	2002	農村における娯楽、大衆音楽、恋愛
『マッハ!』 (Ong-Bak)	タイ	2003	格闘技
『風の前奏曲』 (The Overture)	タイ	2004	王宮における伝統音楽
『ナンナーク』 (Nang nak)	タイ	1999	仏教と精霊信仰、口頭伝承
『フェーン・チャン ぼくの恋人』 (Fan Chan / My Girl)	タイ	2003	子どもの成長、故郷
『青いパパイヤの香り』 (L'odeur de la Papaye verte)	ベトナム/フランス	1993	子どもの視点からみる生活世界、成長、恋愛
『グラン・トリノ』 (Gran Torino)	アメリカ	2008	マイノリティ、移民、世代間交流
『ビューティフル・デイズ』 (Ada Apa Dengan Cinta?)	インドネシア	2004	友情と恋愛、若者文化
『冥土』	シンガポール	2005	年中行事、民間信仰
『僕たちは世界を変えることができない。 But, we wanna build a school in Cambodia.』	日本	2011	開発と援助、大学生
『彼岸花』	日本	1958	日本の家族、西化と日本の伝統的価値観の変容

選定の際には、なるべく舞台となる時代やテーマがかさならず、多岐にわたるように配慮した。ジャンルもスポーツ映画、アクション映画、コメディ映画、青春映画、友情映画、恋愛映画、家族映画、ホラー映画などから選び、偏りのないようにした。タイを含む東南アジアの映画に関する資料は、ハリウッド映画や日本映画に比べて、圧倒的に少ないため、日本上映時の資料やパンフレットなどを可能な限り入手し、繰り返し作品を視聴したうえで、そこに描かれている文化的事象や背景について説明し、学生の異文化理解をうながしてきた。これまで取り上げてきた映画とテーマを挙げると前頁の表1の通りである。

このように、ほとんどが東南アジア映画となっているが、半期に1作品は日本映画を取り上げている。映画鑑賞ノートを添削していると、東南アジアの国々に対する学生たちのイメージが「経済力が低く遅れた国」だという、偏ったものであることがわかる。例えば、ごく少数ではあるが、映画で農村社会が映しだされると「貧しくて大変だと思った」という感想が出ることもある。あるいは都会生活が映し出されれば「意外と都会で驚いた」という感想が出ることもある。

また、日本映画『僕は世界を変えることができない。:But, we wanna build a school in Cambodia.』は、日常に退屈する日本人大学生たちが、カンボジアで学校を建設するボランティア活動を知り、自分たちの無力感を感じながらも学校建設を実現させるという実話に基づくストーリーである。この作品は、馴染みのある若手俳優陣が出演していることや、主人公たちと学生たちとの年齢も近いことから、学生が関心を持って観る映画の一つである。しかし、観終わってみると、援助する側としての日本人、援助される側としてのカンボジア人という構図が「援助する日本は豊かで、援助されるカンボジアは貧しい」という考えを強化してしまうらしく、「自分は豊かな国に生まれてよかった」、「貧しい国に生まれて可哀そうだと思った」という感想が出がちである。こうした感想が一面的かつ固定されたイメージであることを理解してもらうためにも、多岐にわたる映画を選定し、東南アジアの多面的な側面を取り上げ、映画体験を通じてそれを理解してもらうように配慮する必要がある。

## (2) 講義の流れ

実際に講義をどのように進めているかについて述べる。

まず初回は、オリエンテーションとして、クロスカルチャーの講義目的、現代社会における文化の位置づけ、文化を多角的に学ぶことの学術的意義について、文化人類学、地域研究、比較文化学の視点を紹介するなかで説明する。そして、映画を通して文化を理解することの学術的意義として、映画には制作者が育ってきた社会の価値観や文化的背景が反映されること、つまり、映画とは娯楽のための商品であるだけでなく、その背景をしっかりと理解するならば、文化を理解するうえで格好のテキストになりうることを確認する。こうした知識を前提とし、次回以降で東南アジア映画を取り上げていく。

第2回以降の講義からは実際に映画を用い始める。1作品を前半と後半に分け、2回分の講義で1作品を取り上げている。そして講義は、「知る（文化的背景の解説）」「観る（視聴）」「考えを伝える（書く）」という三段階のもとに進めていく。

まず前半の講義では、「知る」段階として、映画を視聴する前に約30分～45分間の説明をおこなう。その際、時間の効率化を測るため、「1. 舞台となる国の概要」、「2. 映画の紹介」、「3. 映画を観る視点」をまとめたレジュメを配布する。ここでは、映画の舞台となる国の紹介、地理や気候、日本との関わり、宗教など、映画を観る上での基礎的な情報を共有した上で、ストーリーの導入部だけを紹介し、その映画の題材となっているトピックを3点、映画を観る視点として提示し、映画を観る際に注目してほしいところや、考えて欲しいところに重点をおいて説明する。例えば、ジェンダーや民族、伝統音楽、民族舞踊、村落における儀礼、祭りなど、映画に関わるトピックを解説し、その映画の文化的背景に注意をうながす。

例えば、タイ映画の『アタック・ナンバー・ハーフ』は、トランスジェンダーの人びと（タイ語では「カトゥーイ」）が集まったバレーボールチームが偏見や妨害のなか、国体優勝まで成し遂げる姿を描いたコメディ映画である。ここでは、ジェンダーと性的マイノリティというテーマをあげた。その他、主要登場人物とのかかわりから、タイにおける中国系の人々について等、理解をより深められるよ

うに補足説明をしていく。こうした説明を終えた後に映画を「観る」段階となり、映画の前半部の視聴に入る。

後半の講義では、前半から1週間空いてしまうため、作品前半部の確認と補足説明をする。映画の後半部を見終えた後に、10分程度の時間を設け、「考えを伝える」段階として、「映画鑑賞ノート」と称したりアクションペーパーを書いてもらう。映画鑑賞ノートには、その映画の内容を理解しているかどうか、内容に関する質問に答えてもらう他、自由記述欄を設け、気が付いたことや考えたことを文章の形で記入してもらい、講義終了後に回収する。

この映画鑑賞ノートは映画ごとに提出してもらい、毎回、これらに目を通し、日本語文章の添削、そして評価できることやアドバイスを記入して返却している。講義で最も重視しているのは、この映画鑑賞ノートを活用することである。この具体的活用については、次項で詳しく述べたい。

### 3. 学生の反応

#### (1) 講義過程における反応：映画鑑賞ノートの活用

映画には、多様な情報が含まれている。その一方で、学生たちは、これまでの映画視聴の経験から、その場を楽しむ娯楽的要素が強いものと捉えている。講義で取り扱う以上、視覚情報をただ一方的に受け取るのではなく、その情報を消化したうえで、新たな理解を引き出してもらわなくてはならない。映画鑑賞ノートは、書くという行為を通じて、映画とかわる態度を受動から能動へと変換してもらうツールである。

また、映画鑑賞ノートによって、教員側は学生たちがどこに反応し、どのようなことを感じているのかを知ることができる。学生の講義への取り組み方の違いがわかる他、理解できていなかった点などもわかり、すぐに講義に反映させ、柔軟に対応することもできる。また、学生によって学ぶことへの意欲や講義への取り組み方の差も大きく、そうした学生たちへ部分的に個別指導を取り入れることが有用だと考えて、映画鑑賞ノートを取り入れてきた。

学生によっては限られた時間内でも映画鑑賞ノートに目一杯書く学生もいれば、「面白かった」「いい映画だと思った」という一、二文で終わってし

まう学生もおり、その差は大きい。文章を書き慣れていない学生には、どの場面のどういうところで、なぜそう思ったのかを具体的に書いてもらうようにコメントしていく。また、漢字や助詞の間違いなどを正す添削から始まり、主語をはっきりさせることや、口語表現を避けることなども地道に指摘していかななくてはならない。一方で、書き慣れている学生には、書く内容のレベルアップを求め、文章について良かったところ、改善すればさらに良くなる点などをコメントしている。

映画鑑賞ノートの活用法については、学生の反応を見ながら少しずつ細かな改善を試みてきた。例えば、映画鑑賞ノートに映画を観ていないと答えのわからない質問を入れるようにした。出てくる小道具や地名、台詞や内容を尋ねる質問などを入れることで、映画鑑賞中に学生の集中力が途切れることのないように、そして、細部により注目して映画を観ることができるよう工夫している。

工夫のなかでも、最も手ごたえがあったのは、学生に映画鑑賞ノートを返却する際に、2、3分間の時間を設け、読み返してもらう機会をつくったことである。この数分間を設けることで、学生たちが講義への取り組む姿勢、特に映画鑑賞ノートに臨む姿勢が丁寧になったことは明らかであった。それまでは、映画鑑賞ノートが返却された後、筆者のコメントや指摘を一瞬だけ眺める程度の学生がほとんどであった。しかし、わずかな時間であっても、書いてから一定期間が経った後に、読み返す時間を設けることで、自分の文章を相対化する機会を得たことは、映画鑑賞ノートに取り組むうえでよいきっかけとなった。これについては、期末におこなったアンケート調査において、映画鑑賞ノートのコメントが励みになったと回答した学生が18名中17名であったことにも表れている。

「知る」、「観る」、「書く」という流れは、往々にして作業が個人化してしまう側面もあるだろう。映画は、複数人でともに観ることにより、そこから生まれる感想や意見、さらにはその空間や雰囲気さえも共有することができ、その中で学生たちは作品への理解を深め、多様な視点や考え方を学ぶことが可能となる。そうした特性を活かすには、学生たちをグループに分け、ディスカッションしてもらい、発表してもらおうという形式も考えられ

るし、こうしたワークショップの実践例もある[山本・伊藤 2005]。しかし、実際に講義内で試みるには時間や人数などの物理的制約、あるいは、学生たちが自発的に意見を述べることに慣れていない等の理由から、すぐに取り入れるのは難しい。このような理由からこれまでのところ映画鑑賞ノートの導入が最も効率的に、学生からのアウトプットを引き出す手段だと考えている。

## (2) 講義後の反応：アンケートより

2013年度の最終講義において、講義の形式や映画鑑賞ノートの実施等について学生たちの意見や要望を知るために、出席した18名の学生たちに無記名のアンケートを実施した。東南アジア映画を利用した講義を実施することの有用性はどこにあるのか、アンケートの結果を参照しながら考察を加える。

### ① 映画鑑賞ノートについて

映画鑑賞ノートについての感想を複数選択式で答えてもらったところ、単独で「楽しかった」と答えたのが4名、「勉強になった」が2名、「難しかった」が7名、「つらかった」が1名となった。また、複数回答では「難しかった」と「楽しかった」が1名、「難しかった」と「勉強になった」が1名であった。「難しかった」と「楽しかった」と「勉強になった」との回答が1名、「難しかった」と「つらかった」と「勉強になった」との回答が1名だった。これを見ると、単独回答の「つらかった」と「難しかった」を否定的な回答と捉えると、これが8名で、それ以外の肯定的に捉えられるものが10名となり、ほぼ半々だといえる。

一方で、また映画鑑賞ノートを書くのが上達したかという質問については、「上達した」と答えたのが13名、「変わらない」が5名との結果となった。

このように映画鑑賞ノートについては、3分の2以上の学生が上達を感じたという点においては、映画鑑賞ノートを取り入れることは、学習成果を実感するには、有用だったといえる。「難しかった」という学生たちのなかには、他の学生の書いたものを読んでみたいという要望もあった。講義中によく書けている文章の一部を口頭で紹介することはあったが、それだけでは不十分であった。今後は学生に了承を取った上で良く書けているものを共有するなどして、改善の余地はあるだろう。筆

者の実感としては、講義に消極的な姿勢を見せる学生も若干いたものの、多くの学生が積極的に取り組んでいる印象があった。そして、数値は、その印象を裏付けるものとなった。また、積極的に取り組んでいる学生も多く、「もっと書くことを勉強したくなった」という学生も2名おり、学習意欲の向上につながった部分もあった。

また、アンケートでは、観た映画のうち、良かった映画から順位をつけてもらったが、ほぼ均等に分かれていたのは、映画選定の段階で多岐にわたるジャンルやテーマの映画を選ぶように配慮したことが、功を奏したと思われる。また、その順位付けは、学生が前半や後半のどちらかを欠席してしまい、半分しか見られなくとも、「いい映画だった」と選択する学生もいたため、講義が2回に及ぶことが学生の理解度や講義についていけないという問題を必ずしも生まないということが明らかになった。映画を講義に取り入れることは、映画自体の長さなどの時間的制約ゆえに敬遠されることも多いが、実はそこまで講義の運営や学生の理解度に問題が生じるわけではないことがわかった。

### ② 講義全体を通して

18名の学生に、日本映画と外国映画について、日常的にどちらをより多く観るかを尋ねたところ、両方を半々ずつ観る者が5名、日本映画を多く観る者が10名、外国映画を多く見る者が3名との回答を得た。ここで指す外国映画とはアメリカ映画、いわゆるハリウッド映画であり、日本とアメリカ以外の映画を観る学生は1名のみで、この場合はフランス映画であった。このように、ほとんどの学生にとって映画を観ることは、日本かアメリカでつくられた映画を観ることであり、講義で第三国の映画として東南アジアでつくられた映画を鑑賞することは、これまでに馴染みのない異文化を経験する一つの材料となりうるだろう。

講義を通して何か新たに興味を持ったことがあるかという問いに関しては、「外国の文化に触れたくなった」、「関心を持った」、「行きたくなった」、「もっとタイ映画を観たくなった」、「ボランティアをやりたい」など、自発的に異文化と接することを望むようになったコメントが18名の学生のうち15名と多かった。自分の属する文化や馴染みのある文化以外に関心を持つことが、異文化理解の

第一歩だとすれば、映画を用いる異文化理解は第一段階の目的は果たされたといえる。

また、異文化理解のツールとして映画は有用であるかという問いに対し、「有用である」と回答したのが12名、「少し有用だ」と言うのが5名と、18名のうち17名が有用だと回答をしていた。この結果は、映画を娯楽としてだけではなく、異文化を知り理解するためのツールであると意識し始めたことを意味する。映画を鑑賞する機会は在学中だけに限ったことではなく、卒業した後も生涯を通じてあるだろう。本講義の経験を通して、映画とは世界に開かれたテキストであるという認識が得られたなら、映画鑑賞と異文化理解の作業は、大学卒業後も続いていく可能性は大にあるといえる。

#### 4. まとめ

本稿では、東南アジア映画を用いた異文化理解教育の可能性を考察した。映画を活用することは異文化理解教育にとってある一定の効果を得ることができる結論付ける。映画は、学生たちが、どこか遠い国だと思っていた国の文化に関心を持ち、身近に感じる大きなきっかけとなりうる。そして、学習意欲を向上させるのにも適切な手段である。特に強調しておきたいのは、映画鑑賞ノートと名付けたワークシートなどを用いて、インプットだけでなくアウトプットのしかけを創り出すことが不可欠だということである。そこで、いかに「楽しかった」「面白かった」以上の感想を学生たちから引き出せるのかということに、心を砕くことが重要である。それには、学生が書いたものを、必ず学生にフィードバックし、それを次の講義につなげていくこと、この繰り返し教育成果を生む一つの方法ではないだろうか。こうした複数回のワークシートのやりとりは、学生たちにとっても学習の効果を実感しやすく、講義に対する関心を維持向上させるには有効である。

また、映画鑑賞は代表的な娯楽として身近に存在するものであることから、生涯を通して映画に接する機会はあるだろう。半年の講義ではあるが、複数の映画を通じて異文化を考えるという体験は、学生たちのその後の人生において、確実に生きるであろうと期待している。

本稿では、講義を通じて学生たちの異文化への

まなざしが、具体的にどのように変化したのか、どのように深化したのかについては、踏み込んだ記述をしていない。それには、より継続的な調査が必要であることから、今後の課題としたい。

(注1) 本稿では映画を、動画全般として使用する。

#### 《参考文献》

- 石川慎一郎 1995 「異文化理解教育とマス・メディア」『英語教育』53(10)、80-82頁。
- 桑本裕二、伊藤美樹子、宮本律子 2008 「『日本事情』への映像教材使用のありかた」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』30号、171-179頁。
- 佐藤成男 2002 「『道化』から『サムライ』へ：1980年代と90年代のハリウッド映画に描かれた日本人像」『国際社会と文化』78-99頁、玉川大学出版部。
- 高瀬文広 1998 「異文化コミュニケーションのための映画題材の利用法の研究：『ある愛の詩』を使用したアメリカ文化分析」『映画英語教育研究：紀要』4号、58-68頁。
- 南出和余 2013 「実践的メディア研究の試み 映像を介した異文化理解教育の可能性：映像人類学の見地から」『桃山学院大学総合研究所紀要』38(3)、75-93頁。
- 南出和余、秋谷直矩 2013 『フィールドワークと映像実践：研究のためのビデオ撮影入門』ハーベスト社。
- 村山匡一郎 2008 「映画教育の必要性」、『立命館大学映像学部特殊講義「映像文化の創造と倫理特 アーカイブと映像マネジメント」』、59-63頁。
- 森泉哲 1997 「映画を使用した異文化コミュニケーション教育：『ミスター・ベースボール』を使用して」『映画英語教育研究：紀要』3号、62-73頁。
- 森野和弥 2003 「映画の中の日本人像：国際理解教育の授業実践例として」『静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇』34号、265-283頁。
- 山中速人 2002 『マルチメディアでフィールドワーク』有斐閣。
- 山本登志哉、伊藤哲司 2005 『アジア映画をアジアの人々と愉しむ一円卓シネマが紡ぎだす新しい対話の世界』北大路書房。

#### 《参考ウェブサイト》

- 文部科学省「新しい教育メディアを活用した視聴覚教育の展開について」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nc/t19920331001/t19920331001.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19920331001/t19920331001.html) (2013年2月10日アクセス)

— 2014. 3. 10 受稿、2014. 3. 10 受理 —